

地球人類が最初に接触した異星起源知的生命体が、全裸系パッキン幼女だった件について

ヤマトとトマトはなんか似てね？

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お久しぶりです。

「たまには地球がチート臭くとも良いのではないかと」という小説を書いていましたが、
職場で何故か役職を押し付けられ、心身共に疲弊し執筆できなくなってしましました。

そして、状況が少々改善したので再開しようとしたら……書けない（泣

という訳でリハビリ執筆です。

基本的には前作よりシンプルに、またカップリングなども変えてゆく予定。

タグはその都度追加で。

地球のチート率は前作より低めです。技術的混入も少ないし。

目次

第01話：“シヨツクカノン・デビューウー戦”	2191年4月1日
第02話：“属性”最終兵器的な要素を持つ先史文明の遺物属性持ちの愉悦主義	1
第03話：“ハイペロン 地球だつて持つてますことよ?”	10
第04話：“第四話目で、ようやく主人公が出てくるみたいですよ?”	16
第05話：“艦隊大消耗戦時代”と呼ばれた時代”	25
第09話：“この作戦が終わつたら……真のヒロイン（？）の登場です”	57

33

25

16

64

真のヒロイン（？）の登場です”

第06話：“この世界線では、全裸系パツキンは口クでなししかいない可能性が微レ存”

第07話：“（頭髪が薄くなつても）働くお父さん”

第08話：“ゲシユ＝タム・ウォールの違い（この世界線限定）。ワープ・グリッドとか、遭難者はザンネンパツキンとかそういう話”

41

第10話：“近い将来に名将と呼ばれる
かも知れない、生まれた星の違う二人の
大佐が邂逅する件について” —————
第11話：“一筋縄では行かない状況”

第01話： 2191年4月1日 シヨツクカノン・デ ビューウ戦

西暦2191年4月1日

地球より2万光年と少し彼方……

テレザート星より大マゼラン星雲方向へ約200光年、イシュタル星系第4惑星（居住不可惑星）付近

その日、地球連邦軍テレザート星駐留艦隊所属、第1警備艦隊第3哨戒分艦隊の48隻を率いる沖田十三准将は、近代化改修を終えたばかりの分艦隊旗艦、金剛型戦艦“金剛”のCICルームにある提督席で、立体投影型の戦況表示ディスプレイを見ながら実際に憂鬱な表情を浮かべていた。

「島君、私はそこと順調な人生を歩んできたつもりだつたんだがね……」

宇宙物理学関連で博士号を持ち、40代で閣下、つまり将官の地位にいるのだから確かに沖田の言葉に嘘はないだろう。

だが、その言い回しから考えると、

「よもや、40代も中盤に差し掛かろうとした今頃になつて貧乏くじを引くことになろうとは、思いもよらなかつたよ」

『心中お察ししますよ、沖田提督』

そう通信で返してくるのは、村雨型巡航艦“村雨”に座乗する分艦隊に一翼を担う第2戦隊長の島大吾大佐だつた。

第3哨戒分艦隊は、旗艦の“金剛”を頂点に村雨型巡航艦12隻、磯風型駆逐艦36隻から編成される。

沖田の直轄は第1戦隊の村雨型6隻と磯風型18隻、島大佐が率いるのは座乗する“村雨”を含む村雨型6隻と磯風型18隻。

本来の分艦隊編成であれば、もう1個戦隊を加えた3個戦隊＝73隻が定数だが、今回は1個戦隊は後詰めに回している。

というのも、

「異星人との接触もこれで三度目……流石に三回連続友好的に、とはいかんか」

「今までが幸運過ぎたんですよ」

そう返したのは沖田の隣に立つ艦隊付參謀、山南修中佐だつた。

「そうかもしけんな。いや、そうなのだろう」

一度目は自業自得故に滅びかけた地球人類に対する“救済”、二度目は復興の道を進んでいた地球人が“受け入れる”側になつた。

そして、三度目は……

「こういう三度目の正直は、嬉しくないな」

“宇宙は、敵意と悪意、それに殺意に不足を感じない土地だよお♪”
ふと沖田の脳裏に蘇る、“彼女”的言葉……

それを肯定するように戦況表示ディスプレイに映るのは、星系……地球連邦の生存領域に侵入してきた所属不明の30隻の宇宙船。

いや、この言い方は大雑把すぎるだろう。

(明確な敵対行動、領宇宙侵犯を行う戦闘用艦艇群か……)

もつともそれは、沖田に限らず地球連邦に所属する軍人全てが“いつか来る日”だと覚悟していたのだ。

この天の川銀河に自分達以外にも凶惡な武装を持つ巨大勢力が存在することは、残念ながら確定的な事実であつた。

正確に言えば、1世紀以上前から、この世界の地球人類は知つていた。

原作と呼ぶべき世界では、「火星には明らかに戦闘艦と思われる宇宙船の残骸」があつ

たらしい。内惑星戦争終結後、その資料は全て失われたらしいが……

だが、この世界線では状況が全く異なったのである。

そもそも、地球人類は内惑星戦争などという“児戯”をやつてゐる余裕など最初からなかつた。

何故なら、西暦2025年に勃発したアメリカを盟主とする有志連合と中露を基軸とするユーラシア同盟との「なし崩し的に始まつた」第三次世界大戦により滅亡に瀕した地球人類は、滅亡回避の対価として一刻も早く“^{テレザート}盟約の星”に向かわねばならなかつたのだから。

それは解釈によつては、“最も新しき神との誓約”と言えるのかもしれない。

そして対価の支払い、あるいは誓約履行の最初のステップとして選ばれたのが、「誰も気づかぬままテラフォーミングされていた火星」であり、その場所に並べられた“この銀河系の中で地球以外で建造された宇宙戦闘艦”だつた。

しかも、鎮座していた多くの艦艇は、使用感や損傷はあるものの「まるで、どこかのスクラップヤードからそのまま持つてきた」ような状態だつたらしい。

当時のまだ未熟だつた地球連邦の技術では、やつとの思いで火星までたどり着いたところでそれらを修復して実戦に使えるようにするには不可能ではあつたが、それでも宇宙に適応する技術を習得する初期段階の教材としては、必要にして十分だつた。

そして、人類が本格的に宇宙を生活の場としてからはや一世紀……これまで地球外起源的生命体とそれなりに上手くやつてきこれた地球連邦に、闘争という試練の時が訪れようとしていた。

☆☆☆

上官にあたる軍の制服組、統合幕僚本部の芹沢虎徹少将に急かされるまでもない。

沖田の分艦隊がここに到達する前に、地球連邦テレザート方面軍は、哨戒網を形成する無人哨戒艇ビケットを二度も所属不明艦船群に接触させ、警告を放っているのだ。

無論、その警告はことごとく無視されたが。

「三度目は、ない」

仮の顔も三度までというが、あいにくと国防委員会は人間の組織なので二度が許容限界だつた。

(こうなれば、やることは一つか……)

「全艦、波動防壁をコンバットステータスに引き上げろ！」『コスマ・パンサー』隊、全機発艦！ 艦首陽電子衝撃砲、自動追尾照準、開始っ!!

沖田は覚悟を決める。

地球連邦は、未だイスカンダルという星の存在を知らない。

しかし、地球人類は150年近くも前に、『理論上、無限のエネルギーを引き出せる半永久機関』の現物を目にして、手に入れていた。

それは当時の人類が、すぐにどうできる代物ではなかつたが、それでも滅びの宿命から一転、宇宙に夢を馳せさせるには十分な『遺物』であつた。

そして、ここ150年の地球人類、発足以降の地球連邦は常にその夢の結晶とも言える半永久機関、人類に光速を超える可能性を秘めた『次元波動機関』の技術の解析と開発に躍起になってきたと言つても過言ではない。

まるで渴望にも似た超光速の夢とテレザートへの到着……

22世紀前半にそれが達成されても、地球連邦は技術開発の歩みを止めることはなかつた。

宇宙が、地球人が公式に『一番最初に接触した異星人』の言う通りの、恩人の……人によつては恩神の言う通りの場所だと仮定するならば、生存に必要となるであろう技術開発を止める理由などなかつた。

金剛型戦艦の艦首には46サンチ(18in)陽電子衝撃砲(ショックカノン)が、村雨型の艦首には30.5サンチ(12in)陽電子衝撃砲(ショックカノン)がそれぞれインストールされている。

エネルギー充填は十分であり、機関に負荷をかけなくとも、現状で毎分20発以上のレートで継続射撃が可能だろう。

陽電子衝撃砲ショックカノンは、通常の陽電子ビーム砲とは（少なくともこの世界線では）意味も威力も違う。

金剛型戦艦の旋回砲塔にも用いられている36サンチ(14 in)三連装陽電子収束荷電粒子砲などの通常の陽電子ビーム砲は、荷電粒子を圧縮／収束し、加速させつつ指向性を持たせて放出する武器であるのに対し、ショックカノンは砲身部で“螺旋圧縮加速”という過程を放出までに挟む。

難しい理屈を省けば、圧縮した荷電粒子を砲身で螺旋状に回転させながら加速させ、ビーム自体にジャイロ効果による直進安定性を付与し、高威力／長射程／高弾速／高命中精度を実現させようとした技術だった。

もつと簡単に考えれば、ガンダムAGEに出てくるドツズライフルのようなものだとイメージしてくれても良い。

現状の技術では物理砲身型のライフリング状螺旋圧縮加速装置が必要だが、そのうち無砲身（不可視の力場砲身）でも実現したいと地球連邦軍は考えているようだ。

「撃^てエツ!!」

沖田の号令のもと、合計13条の螺旋弾道を描く陽電子ビームが、その威力を誇示するように虚空へと放たれた……

一度戦端を開けば、そうたやすく後戻りはできない……沖田は、その苦さを改めて感じていたのだつた。

* * * * *

その敗北は、大小マゼラン星雲の覇者たる“大ガミラス帝星”にとり瑕瑾という言葉にすらあたらない小さな負け戦だつたに違い無い。

15万光年彼方のたかだか30隻程度の消滅程度で、帝国の中枢が激しく動搖することなどない。

だが、彼らはもう少し真剣にこの事象を考察すれば、少しだけ未来は変わつたのかも

しれない。

何故なら……建国以来約1000年、ガミラスが初めて“異星人に一方的に蹂躪された戦い”だつたのだから。

そして、後に多くの歴史家は語ることになる。

この天の川銀河の片隅で勃発した小さな戦いこそが、“古きガミラスの終わりの始まり”だつたと。

10 第02話：【属性】最終兵器的な要素を持つ先史文明の遺物属性持ちの愉悦主義系腹黒パツキンロリは好きですか？【盛り過ぎイイイイイ!!】

第02話：【属性】最終兵器的な要素を持つ先史文明の遺物属性持ちの愉悦主義的全裸系腹黒パツキンロリは好きですか？【盛り過ぎイイイイイ!!】』

唐突で申し訳ないが、古今東西問わず、かなりのパーセンテージで伝承で語られる女神というのは、現代人の価値観で言えばロクデナシだ。

その様はまるで性悪なことが女神の特権のようであり、また理不尽の象徴のような描かれ方をしていることが多い。

例えば、ギリシャ神話に登場する女神ヘラ。

旦那の浮気相手やその子供を祟つたり呪つたりする前に、旦那の女癖の悪さと下半身の緩さをなんとかしろという。

同じオリュンポス十二神の女神、アフロディーテとかも大概だが。

そして地球より2万光年ほど離れたここテレザート星にも、その末席に名前を連ねそ

うな者が存在していた……

“面白くない”

そう自分の穴蔵テレザリアムの中ではつぶやくのは、長い金髪とツルツルロリペつたんなボディがチャームポイントのテレサだった。

もつとも別に彼女は受肉してゐるわけではなく、主に彼女自身の趣味でそう見えるように幻影、有質量立体映像のようなアストラル・ボディを形成してゐるだけである。

たまにペつたんこな胸とくつきりなスジで性癖が破壊されて信者になる者がいる（といふか自称「テレサ様に導かれてテレザートに辿り着いた」者の何割かは、男女問わずそのような手合だつたり……）が、それも彼女にとつては愉悦だった。

蛇足ではあるが、常に丸出しでモロ出しなのは、別にテレサ自身に露出癖があるとう訳ではなく、服は物理的な変化を受けやすい肉の体だから必要という概念があるかららしい。

数々の銀河神話や寓話、御伽噺にその名をちらつかせるテレサではあるが、その実像は実はそこまで神々しいものでも神秘的ものでもない。

手つ取り早く彼女の正体を明かせば、なんのことはないイスカンダルに匹敵するかそれ以上に古い世代の、古代アケーリアス文明が生み出した老舗超高度文明の末裔……といふか“成れの果て”だ。

イスカンダル人ほど傲岸不遜にして邪智暴虐ではなかつたが、同じく古代超高度文明にカテゴライズされる（仮称）先史テレザート文明も、中々にかつ飛んでいる。
なんせ文明の到達点で行き着いた結論が、「肉体という古き衣を脱ぎ捨てて、新たな進化のステージに登ろう」というものだつたから。

きっとテレザート文明は、“陽蜂（怒首領蜂最大往生）”でも生み出したのだろう。
そして無邪氣に人類のためを想う彼女の善意の申し出に賛同し、「死ぬがよい！」されないまま、こことは違う何処かへ逝つたのかもしれない。

もつとも今となつては、テレサさえもその結末は悲劇か喜劇か知る由もない。
ただ彼女がわかるのは、自分が生まれたきっかけが億の先史テレザート人の残滓、この星と結び付き残留思念となつた集合無意識より生まれたことくらいだ。
いや……ここで一つ仮説を立てよう。

もし、本当に先史テレザート文明が“陽蜂”に似た何かを生み出したのだとしたら、
存外にその存在がコアとなり、遺された想いを集めて今のテレサとなつたのかもしれない。

だとすれば……

“やつぱり面白くない”

遥か昔、テレサは肉の軛から解き放たれ、旅立つた大好きな人達を見送つた気がした。

そこに不満はない。

受け取った遺された想いが自分を形作ったのだとしたら、それほど嬉しいことはない。

自分が遺された存在としても、寂しいとは思わない。

でも、少しだけ別の不満があつた。

悠久の時を、制限のない生を与えた自分に娯楽は必須だとテレサは考えていた。要するに、この世に遺された俗っぽい願いや望みもまた彼女は、叶えられなかつた無念としてしつかり受け取つていたのだ。

個人のそれではないが、人間が根源的に持つ根源的な欲求のようなものだ。

その欲求を満たすため、テレサは時間や空間を超越するコスマチューブに自分の意識を乗せ、宇宙を物見遊山することを覚えた。

そしてある時、自分の意識や感覚は文字通り時間や空間を超越していることを自覚した。

つまり、自分にとつて確定した過去も、未確定で揺らぐ未来の可能性も見通せることに気がついたのだ。

更に億の夜を超える頃、“自分以外の自分が居る”事に気づいた。

そう、並列世界あるいは平行世界の存在を知覚したのだ。

14 第02話：【属性】最終兵器的な要素を持つ先史文明の遺物属性持ちの愉悦主義系腹黒パックキンロリは好きですか？【盛り過ぎイイイイイ!!】

そして、この世界線の……もしかしたら、最高性能のエレメンタル・ドールに似た何かを核としたかもしれない彼女は、こことは違う世界に住まう自分へとアクセスした。別に他の世界に干渉するつもりなどなかつた。

ただ、好奇心という欲求を満たせればよかつた。

だが……

“好きなお話がない”

1万と20000ほどの年代記クロニクルを見た後に、彼女はそう感じた。

計算上、1億と20000見ても好みの物語が見つからない可能性が高かつた。

“やつぱり、見てるだけじやダメなんだ”

だから、

“見たいのなら、テレサが創る側にならないと”

そう決めた。

☆☆☆

“候補”は、もうあつた。

自分が見たどの世界線でも、どこかしら何かしら自分と関わりを持つた星……

幸い、あるいは当然のようにその青い星は、自分の世界線にも存在していた。その星の住人の暦によれば西暦2025年7月4日、滅亡の始まりを告げる最初の核が発射された。

これといった明確な怨嗟があつたわけじゃない。

核の炎に包まれる数年前から、大陸東部より異常進化を遂げる病原性ウイルスが惑星上を覆い、経済活動に致命的な打撃を継続的に与えた。

その根絶もままならぬまま、今度は衰退したかつての大國が隣国に攻め込み、穀倉地帯を焦土に変え、世界的な食糧不足が連鎖的に起きた。

人々の不安が焦燥を生み、それがやり場のない不満と誰かにぶつけたい憤怒に変わるまでそう時間はかからなかつた。

やがて寛容は不寛容に変わり、引き金を引く躊躇が消失した。

化石燃料文明から脱却できぬまま、宇宙に広がれぬままその星のアケーリアスの落とし子達は終焉を迎えるはずだった。

そしてそれは、紛れもなく好機だつた。

“救済を望むのは、あなた達かな？”

第03話：“ハイペロン 地球だって持つてますことよ”

？”

“大ガミラス帝星”との開戦から数年間は、膠着状態や自然休戦期を挟みながら、戦闘はなお継続的に続いていた。

ガミラスと地球連邦、この2つの勢力がいまだ決定的な破綻をきたしていないのは、皮肉にも両国ともに決定打に欠けているからだつた。

地球連邦の人口は、2190年の国勢調査で合計150億人強。銀河英雄伝説の自由惑星同盟より20億人ばかり多い。

2025年勃発の第三次世界大戦の影響で、最悪の時は”とある世界線”で地球外起源炭素作業機に痛めつけられた1999年当時の地球総人口より数を減らしたにしては、150年ちょっとで中々の増え方だつた。

まあ、間違いなくどこぞの全裸系パツキンロリが何かしたのだろうが。（テコ入れ）

実際、2025年を堺にテレサの地球人類へのテコ入れは定期的に行われ、太陽系とテレザート間の2万光年を片道1ヶ月程度で無理なく往来できるようになつた今では流石に頻度は落ちたが、それでも0になつたわけじやない。

そのおかげもあつて、地球連邦は現在、計6基の“機動要塞”という移動できるデカブツを頂点に、無数の宇宙軍港や地上基地、そこに駐留する3万隻超の連邦宇宙軍艦船と、合計25万機の軍用機を保有するに至つた。

それらを機能させる予備役を動員してまで集めた（政治的にも経済的にも問題が多すぎる徴兵は行われていない）1億人の将兵を揃えることにも成功している。

だが、一見すると膨大に見えるこれらの兵力を持つてしても、2万光年の間にある全ての恒星系に軍を駐留させるのは土台無理な話だつた。

むしろ、基地を置いてるのは通商の要所となる部分だけで、そこから無人艦艇を含む広域哨戒網や警戒網を敷くことによつて、どうにか航路を維持しているというのが偽らざる本音である。

端的に言えば、今のところ積極的な全面攻勢に踏み切れるほどの潤沢な兵力は地球連邦にはない。

対してガミラスは、実働戦闘艦艇数こそ8万隻と地球連邦の3倍近いが、如何せん彼らは維持すべき戦線が多すぎるし、戦域が広大すぎた。

更に今のところ宇宙海賊扱いの“蛮族”としてしか認識されていないガトランティスが、大マゼラン星雲で蠢動し始めてるせいもあり、余計に兵力的余裕がなくなってきた筈だ。

そこで開戦より2年が経過した2193年頃、ガミラスは地球連邦勢力の哨戒の穴を突くように必要なら浮遊大陸まで持ち込んで前線基地を設営、宇宙規模の投石と言える遊星爆弾や原作で飛び立とうとするヤマトに向けられた星系間対惑星攻撃用大型ミサイルなどを用いた無差別ロングレンジ星系間飽和爆撃を仕掛けるようにドクトリンを切り替えた。

だが、これが地球連邦の逆鱗に触れた。

軍事施設も民間人居住区も一緒に大量破壊兵器で吹き飛ばすやり口は、自業自得とは言え核戦争の相互確証破壊で全滅しかけた経験を持つ地球人の虎の尾を踏むのに十分な蛮行だったのだ。

そして、ガミラスは地球連邦軍の宇宙迎撃能力や探知能力を完全に甘く見ていた。

2194年6月に誰も表立つて口には出さないが、「報復と懲罰」を目的に発動された“死の支配者作戦”は、守勢的な姿勢を貫いていたこれまでの地球連邦の軍事作戦に比較し、明らかに異質な作戦だった。

その発動に伴いガミラスの遊星爆弾や大型ミサイルの発射地点を算出した地球連邦は、開発はしていたが使用を自粛していた兵器の封印を解くことを決定した。

その兵器の名は、

“重核子爆弾”
（ハイペロン）

何故、地球がそれもこんな早い時期に重核子爆弾を保有していたのか……？

この作品のオリジナル要素かと言えば、そういう訳では無い。

実は原作（リメイク・ヤマト）でも、重核子爆弾は“地球が保有する兵器”として登場するのを存知だろうか？

無論アニメ本編ではなく、コミカラーズ版、それも単行本未収録エピソードにおいてだが。

概要はこうだ。

地球脱出が目的とされる“イズモ計画”には、一握りの上層部しか知らない裏があつた。

その脱出の意味は、決して地球人類全員を安全域まで逃避させるというものではない。

その本質は、超光速航行が可能な次元波動機関搭載船に人間を含む地球生物の遺伝子を詰め込んだ播種船として用いるということにある。

そして現在生きている地球人は、その脱出させるべきエレメントには含まれない。では、残された地球人はどうするのか？

それは……播種船が出航した後、地球本土の占領に来たガミラス軍もろとも地下深くに秘密裏に設置されている重核子爆弾で死滅させる手筈だった。

即ち、玉碎によつてガミラスへの隸属を拒否すると同時に、地球という存在そのものをリセットしてやり直そうという信念に基づくものであつた。

内容が内容だけに、道理で単行本に収録されなかつたわけである。

とは言うものの、重核子爆弾と書くと如何にも厳しいが、重核子自体は正式には“ハイペロン”というもので、これは“バリオン（亜原子粒子＝原子より小さな粒子）”の一種で、バリオン自体も“ハドロン（複合粒子＝素粒子の複合体）”グループの一つである。

付け加えるとごく少量であれば2022年現在の地球の技術でも、高エネルギー加速器があれば生成できるのだ。

それとわりと誤解されているのだが……重核子爆弾は人間の脳だけを重核子^{ハイペロン}で破壊すると思われがちだが、それは旧作が公開された当時、冷戦時代真っ只中で中性子爆弾が脚光は浴びていた時代だからこそ広まつた誤認である。

実はオリジナルの設定でも「任意の生物の脳細胞を一撃に死滅させる」とされるのは、

ハイペロンではなく最終的にはベータ変調された重力波であり、ハイペロンは重力波を発生させる触媒になつてゐるに過ぎない。

だからこそ、2190年代の地球連邦がハイペロン、バリオン、ハドロンの豊富な技術蓄積を持つていても不思議はなく、またこの世界線の地球連邦は、主にテレザート在住の誰かさんに起因する”とある理由”により、原作より数段高度な重核子関連の技術を保有していた。

そして、無差別ロングレンジ攻撃をしてきた天の川銀河に巢食うガミラス勢力に、地球連邦は容赦しなかつた。

珍しくも攻撃的な布陣で出撃した地球連邦選りすぐりの強襲任務群は、ことごとくガミラスの守備艦隊を壊滅させた後に発射地点と特定した11箇所の基地にワープさせた重核子爆弾を投下、起爆させた。

旧作の暗黒星団帝国のように脅迫目的ではなく、完全に基地に居るガミラス人全てを殲滅するために使用したのだ。

この作戦で、少なくとも重核子爆弾が透過されたガミラス基地に生存者はおらず、故に捕虜も発生しなかつた。

その後に入つた宇宙海兵隊や空間騎兵隊が隅々まで調査し、「抵抗してきたのはガミ

ロイドだけだつた」と報告したのだから間違いないだろう。

更に入ってきた工兵隊により、小惑星点火用の反射衛星砲や反射衛星、大型ミサイルや制御装置一式に無傷のガミラス艦艇や宇宙機など、持ち出せるものは根こそぎ持ち出した。

最後に法務士官立ち会いのもとに戦死者の私物や官給品が遺品として集められ、「死体をそのままにしておくのも忍びなく、衛生上の問題もある」という建前で、遺体はすべて回収され必要な生体データやサンプリングを行い、リストが作成された後に荼毘に付された。

無論、これは言うまでもなくガミラス側に「何を使つて将兵が殺されたのか？」を司法解剖などで悟られないための処置であつた。

* * * * *

当然のように、ガミラス本国では主に軍部が蜂の巣を突いたような大騒ぎになつた。何しろ彼らにしてみれば、十分な防備を固めていたはずの前線基地が、「ある日突然、11箇所も同時に音信不通になつた」のだから当然だろう。

大至急、近隣の部隊に調査に向かわせたが、厳重な哨戒網を敷いていた地球連邦の艦隊に追い散らされ、ほうほうの体で逃げ帰つてくる始末。

それならば大規模な編成の艦隊で一気に攻め込みたいところだが、ガミラスの天の川銀河方面軍は薄く広く艦隊を配置していたために、集結まで時間がかかる上に補給を考え、どこを集結地点にするかという問題もあつた。

やがて、永続的に占領する気がないらしいテロン人が艦隊を引いたあとに調査隊が入つてみれば、

『何もありません。本当に何も……ただ、ここが基地として利用されていた場所で、その跡地であるとわかるだけです』

そう目から光を失つた調査部隊員の報告を聞いたガミラス軍情報部は頭を抱えた。とにかく、何が起きたのかわかる証拠がなさすぎた。

11箇所の基地が壊滅したのは理解できたが、肝心のその方法が推測不可能だつた。

故にガミラスは、

テロン人の手が届くところに基地は設営しない。テロン人との戦争は、足の長い戦闘艦による長駆艦隊戦で決着をつける

というシンプルな方針転換を行つた。

だが、これがガミラスにとり更なる悪夢の始まりだつた。

そう、2194年を堺に続々と就役が始まる地球連邦のより強力になつた最新鋭艦群のせいで、最終的にキルレシオが1:10まで悪化する……地球連邦艦を1隻沈める間に、ガミラス艦が10隻沈む羽目になる”艦隊大消耗戦時代”の幕開けであつたのだから。

第04話：“第四話目で、ようやく主人公が出てくるみたいですよ？”

2198年3月、太陽系・テレザート間航路

地球より約8000光年……第68哨戒任務群、旗艦：装甲巡洋艦“セント・ヘレナ

”

2194年からの後継の八雲型戦艦の就役と共に、戦艦から装甲巡洋艦に艦種変更された金剛型。

その中の幾隻かは艦底面に背負式に装備されている2基の36サンチ（14in）三連装陽電子収束荷電粒子砲のうち、後方の四番砲塔が撤去され代わりに居住区画や格納スペースを増設、完全編成の宇宙海兵隊ないし空間騎兵隊1個増強小隊程度を装備一式ごと運用できる「揚陸仕様」へ改造が施されていた。

ビジュアル・イメージ的には原作金剛型戦艦の四番砲塔を取り外してその分下つ腹を

パテ盛りするようにふくよかにし、原作宇宙戦艦ヤマトの艦底後部のコスモ・ファルコン射出用ハッチを取り付けた感じだ。

この“セント・ヘレナ”もそのような揚陸仕様の改造を受けた金剛型の1隻だった。「それにしてもアンタも物好きだねえ。4月に装備実験航空隊に配属だつてのに、わざわざ哨戒任務に志願するなんてさ」

さて、その船の食堂で青年に気軽に話しかけてきたのは、長身とポニー・テールが活発さを示す、“カツコいい女”路線を地で行く地球連邦軍空間騎兵隊所属の軍曹、“永倉志織”だった。

「おつと、これは失礼。今や上官、少尉殿でしたね？」

と、おどけた様子で敬礼する永倉に青年、いやまだ少年臭さが残る主人公……“古代進”は苦笑しながら、

「やめてくださいよ、永倉教官。貴女にそうされるとなんというか…………こそばゆいです」人の縁というのは、どこでどうつながるか分からぬといいうのは洋の東西を問わずに言われることだ。

そして、この揚陸仕様に改装された装甲巡航艦の中でも縁の糸は、再会によりまた紡がれていた。

さて、古代進と永倉志織の縁というのも中々に面白い。

時間は、古代進がまだ士官候補生だった時代まで遡る。

☆☆☆

古代は士官学校時代、パイロット養成科を履修していたのだが……特に彼が履修していた戦闘機コースには、とある必須受講訓練がある。その名は「不時着時生存帰還訓練」だ。

内容は読んで字のごとく、事故やら墜落やらのアクシデントで愛機から放り出されたとき、どうやって脱出し生き残り、味方がいるところまで帰還するかという訓練だが……その中で一番過酷とされているのが、『白兵戦ブートキャンプ』と呼ばれる訓練だ。

つまり、「敵兵に囲まれた状況で如何にして生き残るか？」を骨子としたもので、当然のように白兵戦訓練が含まれていた。

もうお察しかもしれないが、古代が放り込まれたのが空間騎兵隊、桐生悟郎中佐（當時）麾下の部隊で、指導教官だった軍曹が永倉だったというわけだ。
ちなみに当時の永倉もまたなつたばかりの新米軍曹で、当然のように訓練生を受け持つのは初めて、つまり古代は永倉にとつても教え子第一号だったということになる。

そういう意味でも思い入れ深い生徒ではあつたが、それに輪をかけて印象に残つていいのが古代はいわゆる優等生であり、「色々な意味で」優秀な生徒だつたということだ。とりわけ射撃に関して高い適性があり、パイロット・サバイバル必須の軍用拳銃メイソンのCQBタクティクスだけでなく、海兵隊ならばに騎兵隊の象徴とも言える複合レーザー・アサルトライフルを相棒とした通常陸戦訓練も卒なくあるいは難なくこなし、それどころかリニア・スナイパーライフルにまで高い適性を見せたのは正直、永倉も内心で舌を巻いた。

『試しに撃たせてみたら、玄人はだしだつた』

と当時の永倉の訓練詳報にも記してあるほどだ。

ちょっと本気で空間騎兵隊にスカウトしたくなつたが、「航空技量主席」と記される成績ログを前にしては諦めるしかなかつた。

余談ながら同時期、同じ部隊で白兵戦訓練を受けていたのが、後に無二の親友となる“島大介”だ。

彼は航海科なのだが……白兵戦訓練を受けていた理由は、「艦が航行不能あるいは不時着した際、侵入を図る敵兵を迎撃つ」ためのカリキュラムを受講する必要があつたかららしい。

なので、古代が野戦訓練がメインであったのに対して、島は日夜元気に艦内を模した

キルハウス・プラクティスをこなしていたらしい。

ついでに書くと古代は前述の通り銃器メインのCQBが得意なのに対し、島はナイフ戦や無手格闘術を含む近接戦闘術：CQCを得意としていた。島の射撃の腕前は軍で標準的と言つて良いものだつたが、格闘術に精通していたようだ。

特に蹴り技が強力で、オーバーロード作戦で鹵獲し修復、訓練用に再利用しているガミラスの戦闘用アンドロイド、通称“ガミロイド”を一撃で蹴り壊す姿を見て、古代は「コイツを怒らせたら怪我じやすまないな」と戦慄を覚えたらしい。

……やっぱり古式の琉球唐手だろうか？

そのせいもあり、島は島で空間騎兵隊に勧誘を受けていたらしいが、父と同じ船乗りになる志を持つ島は、鋼の意思で誘いを蹴つたようだ。無論、物理的にではない。

そして古代と島は、年齢が同じで同じ地獄の訓練を生き延びたことで意気投合、友誼を結ぶ事となる。

もつとも、2198年現在においては、まだ「再会できたら、酒でも飲もうや」という感じの友情はあるが。

☆☆☆

古代はその後、新米少尉として第7航空団、最新鋭の汎用艦上戦闘機“コスモ・ゼロ”が配備された戦闘機隊配属となつた。

しかし、任官1年にして異動の辞令が唐突に降つたのだ。

新たなる配属先は、“第13装備開発実験航空隊”。

まだ出来たてホヤホヤの部隊で、テストするのは海の物とも山の物ともつかぬ初期段階の試作機ではなく、実戦テストに投入できるレベルまで仕上がつた機体であるらしい。

要するに試作機の看板を外し、初期生産に移行できるかどうかの判断材料を捻り出す部隊ということだ。

長いので第13実験飛行隊と略すが、かの部隊が求めた人材は「経験が浅く、尚且つ腕の悪くないパイロット」だ。

チャック・イエーガーの例を出すまでもなく、テスト・パイロットというものは経験があり腕が立つパイロットが選ばれる。何が起ころるかわからない実験機や試験機を飛ばすのならそれも当然だろう。

確かに第13実験飛行隊にもその手のパイロットは在籍している。だが、それだけで

は部隊の性質上、足りないのだ。

わかりやすく言えば、彼らが取りたいデータは「新型機を経験の浅いヒヨコに与えた場合の挙動」だが、同時に「つまらん操縦ミスで墜落でもされたら目も当てられない」というところだろうか？

そういう意味では、古代はまさに適任だろう。

そうでなければ、こうも露骨な一本釣りはされないだろうが。

もつとも、今回の辞令の妙な部分は、普通は人員の異動だけなのだが内容的に『上層部と話はつけたから、君の愛機も一緒に運んできてくれるのかな？ 新型機との性能比較に使いたいんだ。ああっ、治具とか整備機材やら何やらはこっちで用意するから、コスマ・ゼロだけ持つてきてくれればいいよー』という命令書も同時に受け取ったところだろうか？

もつとも、これはコスマ・ゼロがまだ配備開始から3年も経っていない最新銃機で、前線に回すだけで今のところ生産ラインが手一杯になつている現状を考えれば納得できなくもない。

実際、古代が間借りしている『セント・ヘレナ』も揚陸仕様に改修する際にコスマ・ゼロや100式偵察機などの新型機運用能力を獲得しているが、実機は未だに配備されて

おらず、艦載機はおなじみのコスモ・パンサーのままだ。

そう、そしてコスモ・ゼロを搬送手段として提案されたのが、戦隊規模の麾下を引き連れ哨戒任務中に第7宇宙団基地のあるテレザートで補給を行い、地球へ戻る第68哨戒任務群に便乗することだつた。

第68哨戒任務群は地球・テレザート間の巡回哨戒任務を行う部隊であり、都合が良いことに航路上、補給を行う惑星に古代の新たな配属先があり、旗艦の“セント・ヘレン”にはコスモ・ゼロの運用能力が備わつていた。

本来なら古代はゲストであり、積み荷の持ち主以上のものではないのだが、流石に運んでもらうだけでは申し訳ないと思ったのか、あるいは移動中に腕を鈍らせたくないといふ向上心なのかわからないが、古代は第13実験飛行隊の拠点に到着するまで哨戒任務への協力を志願し、めでたく受理されたという訳だ。

だが、この選択こそが古代進という男の運命を、良くも悪くも大きく変えてゆくことになるのだつた。

第05話：“艦隊大消耗戦時代”と呼ばれた時代”

2198年3月、太陽系・テレザート間航路

第68哨戒任務群、旗艦：装甲巡洋艦“セント・ヘレナ”

その“救難信号”を傍受したとき、第68哨戒任務群を率いる“山南修”大佐は、頭を悩ませてしまう。

現在、第68哨戒任務群はテレザートからの復路にあり、コスモ・ゼロをパイロットごと赴任地までエスコートするという副次任務はあるが、それ以外はこれといった特別任務のない……通常の哨戒任務と、要所要所に無人警戒網の保守点検や無人偵察ポッドの補充、宇宙灯台のデータログ確認、不審なデブリの調査と破壊を含む撤去、掃雷任務などを行っていた。

まあ、こういう船外作業が多くあるからこそ、空間騎兵隊を引き連れているのだが。

そこに前触れ無く飛び込んできたのが、弱すぎて個体識別できない、だが明確な地球

連邦の国際救難信号エマージェンシだつた。

無論、見て見ぬふりをするとか、無視するという選択肢はない。

船乗りの心意気云々に出すまでもなく、少なくとも宇宙軍はまだ惑星上で海軍と呼ばれていた時から、大きく言えば制海権と通商路の維持を第一義とする組織であり、軍民問わず自国の船舶の救難はその職務に含まれている。

しかし……

(どうにも、『キナ臭い』ねえ……)

山南は思考を巡らせる。

そもそも、一介の大佐に過ぎない自分が、戦艦の艦長ではなく戦隊1つを引き連れる事になつてゐる理由……それは、第68哨戒任務群に限らず100近くも編成された哨戒任務群について考えるべきだつた。

哨戒任務群が編成されたきっかけは、ガミラスのドクトリン変化が背景にあつた。

2194年に発動された『死の支配者作戦』……天の川銀河に設営された地球連邦領域近隣11箇所のガミラス前線基地に対する重核子爆弾の投下は、予想以上にガミラスに影響を及ぼしていた。

そう、例えば彼らが「テロン人」と呼ぶ勢力との戦争計画を大幅に見直さなければならなくなるほどにだ。

遊星爆弾や戦艦より巨大な超大型ミサイルによる無差別ロングレンジ爆撃から、

“テロン人の手が届くところに前線基地は設営せず、足の長い戦闘艦による長駆艦隊戦で決着をつける”

という方針にだ。

だが、それは結果としてガミラスどころか地球連邦でさえも予想しなかつた結果となつたのだ。

2195年初旬から2197年中旬までの約2年半、彼我双方の参加艦艇数1000隻超えの大規模会戦が頻発し、また動員規模を考慮しなければこの間に起きた軍事衝突は200を超える。

計算上、4日に1回のペースで何らかの戦闘行為が行われていた計算になる。

無論、もつとも大規模会戦が集中したのは地球連邦、いやおそらくは天の川銀河最高峰の資源地帯、こと反物質に限れば産出量無限とされるテレザート星系近辺だ。（実は産出できるのが反物質だけとはテレサは一言も言つてないが……）

しかし、それ以外の場所……地球とテレザートの航路上、その多くの場所にガミラスの艦隊は出没した。

200を超える戦いが2年半の間にあつたと書いたが、これでさえ地球連邦が地球と

ガミラスの間に敷いた2万光年の宇宙通商路、そしてその要所に設けた宇宙艦隊拠点や6基の機動要塞の哨戒網や警戒網に引っかかった敵を迎撃した数にすぎない。

実のことろ……定点観測設備や指定された海域や航路を定期巡回する無人艦や無人偵察ポッド／ドローンである程度穴埋めしているとは言え、それ以外の部分は目が届かず、艦隊出没の頻度から考えてこの広い天の川銀河にガミラスにより連邦が未確認・未発見の軍事拠点を、それも複数が新規に設営されていることは確実視されていたが、鹵獲した敵艦を調べても地球連邦に場所を知られるのを嫌がったのか、航路データは途中からきれいに抹消されていた。

“こちら側”に寝返った捕虜の話を聞く限り、航路図が途切れてるところまで戻るとその先の航路データが再受信される設定になつてているらしい。

どうやらオーバーロード作戦は、ガミラス人に想定以上のトラウマを植え付けてしまつたようだ。

☆☆☆

だが、その状況も2197年も後半に入ると再び変化する。

ガミラスは正面から殴り合うことをやめ、小規模で隠密性や機動性の高い少數精銳部

隊を用いてこちらの哨戒網をすり抜けようとするドクトリンに切り替えたようなのだ。

だが、この変化に関しては地球連邦とて納得はできた。

オーバーロード作戦で各種大小装備諸々とともに入手した情報を解析した事により、地球連邦は“大ガミラス帝星”を僭称する敵国の大まかな位置を把握自体はしていたのだ。

地球より16万8千光年の彼方……大マゼラン星雲の中に、彼らの本国はあつたのだ。

それを知った地球連邦の政府と軍の上層部は、素直に頭を抱えた。

何しろ正しく“距離の暴虐”……この世界線では、地球から見てテレザートは大体大マゼラン星雲方向にあるのだが、そこを寄港地にしたとしても14万8千光年という旧作ヤマトにおけるイスカンダルまでの距離が横たわっているのだ。

八雲級戦艦を頂点とする現在の地球最新鋭艦の一日の移動距離は、安全マージンを考えると250光年ワープ×3で750光年というところだ。

仮にテレザートから出発するにしても、ガミラス本国に到達するまで約200日……確かに機関冷却のリスクをあえて看過すれば1日4回のワープ、日速1000光年の超光速航行で、何事もないことが条件だが計算上は150日以内に到達できるかもしない。

だが、当然のように5ヶ月も無茶な冒険航海ができるように軍艦は作られてないし、地球の軍艦は基本的に防衛用途を目的に設計段階から建造されているため、そもそも15万年もの距離を無寄港・無補給・ノーメンテで航行できるようにはできていないのだ。いや、地球連邦各所で極秘裏に行われている“現在建造中の船”なら可能かもしれないが、少なくとも2198年3月の時点では、連邦のどこを探しても、大マゼラン星雲まで到達できる船はない。

しかも、地球人が解析できたガミラス人の航路図は実に大雑把であるうえ、彼らの拠点の目星はついたが、それ以外の“難所”だの何だと推測しかできない物や意味不明の表記や記述が多数あつたのだ。

それこそ、「実際、行つてみなければ状況がわからない」という感じだ。

ここに経験の差がモノに出た。

ガミラスは何だかんだ言つても、驚くほど短い期間（古代イスカンダルにより、ライバルになりそうなつよつよ宇宙文明が粗方エレメント化されているとはい）で大小マゼラン星雲で霸権を確立した軍事国家で、地球はどこぞの全裸系パツキンロリのテコ入があつたとしても、本格的に宇宙を生活の場としてから1世紀程度の新米宇宙国家にすぎないということを、改めて思い知らされることになつたのだ。

まあ、逆に言えばそんな短期間で2万光年も離れた2つの恒星系を結ぶ航路を往来し、あまつさえ今のところ制海権を維持している地球も異常と言えば異常だ。

そして、その地球という国家の異常性、言い方を変えればテレサの最大の被害者もまたガミラスであった。

そう、地球連邦上層部はこう結論付けたのだ。

“如何にガミラスが巨大霸権国家だとしても、1万5千隻の喪失は無視して良い問題ではなかつた”

と……

この2年間でガミラス側の撃沈確認、大破や中破による航行不能などで地球連邦に処分や確保された船の数は15000隻を越えていた。

更に悲劇的だったのは、その間に地球連邦が受けた被撃沈、損傷により修理不可と判定された艦艇数は、1500隻に届いていないのだ。

キルレシオ、1：10……

奇しくも、2年半に及ぶ一連の大規模な艦隊戦闘は、奇しくも地球連邦でもガミラスでも、ほぼ同じ呼ばれ方がされる事になる。

曰く、

“艦隊大消耗戦時代”

慥かに保有艦艇の5%を喪失した地球連邦が負ったダメージも、組織工学的には決して小さくはない。

だが、どちらがより激しく消耗したかは、何より数字がよく物語つていた。

この時期、ガミラスが天の川銀河方面に投入した戦闘員は、ガミロイドを除けば9割近くが非ガミラス系、つまり“二等ガミラス人”という被支配民族で構成されていたが……それで「青い肌を持つ純血のガミラス人の死者は多くはない」と強弁したところで、ごまかせるような小さな数字ではなかつたのだ。

だからこそガミラスはドクトリンを変更したのだが……

地球連邦軍は、あるいは山南は、まだどのような変化を遂げたのか？　本質的に何が変わつたのかを、未だ明確に掴みきれてはいなかつたのであつた……

第06話：『この世界線では、全裸系パツキンは口クでなししかいない可能性が微レ存』

地球より16万8千光年彼方……

大マゼラン星雲、某所

その日、男はテラスより美しく輝く、どこまでも蒼い空と碧い海を眺めていた。特に彼は水平線……蒼と碧が混じり合い、境界線を失うその風景が好きだつた。（我々は青い肌が美しいと、高貴だとうそぶくが……）

「この美しさの前では、青い肌が高貴などと戯言に過ぎんな」

すると、後ろからクスクスクと鈴を鳴らすようなおやかな笑い声が聞こえてきた。「いいの？　アベルト？」ガミラスの最高権力者がそんなこと言つて？

青い肌の男は誰の声なのか、振り向かなくともわかる。なぜなら、この場所には今は2人しかいないのだから。

「いいのさ。所詮は『ヒトザル』。王だろうと総督だろうと皇帝だろうと、君にとつては『猿山の大将』以上の意味などないのだろう?」

「もう。その言い方は少し意地悪よ?」

「ふくつと頬を膨らませる金髪の美女。

黄金律と言いたくなる女性らしい丸みを失わない均整の取れたボディラインとシミ一つない白磁のような肌……

その美貌を隠すのは愚かと言わんばかりに何もまとわぬその姿は、なるほど確かにひどく絵になる。

一応言つておくが金髪全裸という特徴は一致しているが、テレサではない。

瞳の色も違うし、何よりテレサは美女ではなくジャンル的にはロリ枠の美幼女だ。

「すまんすまん」

と青い肌を持つ美丈夫は、女に隣にくるように手招きし、

「君の妹君は、もう辿り着いただろうか?」

「予定通りなら、そろそろ」

肩を抱かれながら、女は少し愁いを帶びた瞳でそう答えた。

望まずに民族の命運を背負わされた男と、終わることなき墓守の役目を押し付けられた女……。

純粹に愛を語るには抱えるものが大き過ぎる二人は、とても良く似ていて……似ているからこそ、傷の舐め合いに見えててしまう。

一時、辛辣な現実を忘れ、肉欲に溺れたただの男と女として求めあつたとしても、現実からは逃れられないことをこの二人は誰よりも知っていた。

虚しさを感じないと言えば嘘になる。

だが、それでも自分が一人でないことを知覚するには、他者の肌とぬくもりが必要なのだ。

真実を知つても、男は女を愛し続けている。

真実を語つても、女は男を愛しいと思う。

それが悲劇を生み出し続けるとしても、もはや止められないことを二人は知つていた。

* * * * *

“ 良いんじゃないかな？ せつかく肉の体を得たのだから、その業に溺れてみるのも一興だよ♪ ”

“ でもね…… ”

“ 宇宙は貴女のものじゃないんだよ？ 墓守さん♪ ”

そして、魔女はほくそ笑む……

そして、舞台は再び装甲巡航艦『セント・ヘレナ』
正確には、その食堂だ。

「ところでさ、古代少尉」

「なんですか？ 教官」

なにやらすっかり白兵戦訓練の時代の空気感になつた永倉志織はおもむろに、
「ぶつちやけ、あんたつておっぱいの大きな女、好きだよね？」

盛大に爆弾を落とすのであつた。

「ブフッ！」

思わず飲んでいたコーヒーを吹き出す哀れ古代進であつた。

「な、なんですか？」

「いや、あんたつて大抵、女を見るとき、顔からじやなくて胸からみるなーと前々から
思つててさ」

「そ、そんなことは……」

しかし、永倉はニヤリと笑い、

「誤魔化そうとしても無駄だよ？ 女はそういう視線には敏感なんだ」

「うつ……」

進退窮まつたという顔をする古代に対し、永倉はむしろ優しげに、

「別に責める気もないし、咎めてるわけでもないよ？ まあ、あんたも年頃だと思つて

ね」

「そりや俺だつて一応、男ですから」

「ふーん」

永倉は、ふと思い出したように、

「あつ、そういうあんたが好きそうな娘、この船にも乗つてるよ

「はあ？」

「いや、私のダチなんだけどね、この間、たまたま非番がかちあつて部屋飲みしてたら『彼氏ほしー』とか騒ぎだしてね」

酒癖は少々悪い（絡み酒）が、悪い娘じやないんだよなーなどと永倉は思いつつ、

「今度、紹介してやろつか？」

だが、古代が何らかの答えを返す前に、艦内に緊急招集を告げる放送が響き渡つたの
だった。

第07話：“（頭髪が薄くなつても）働くお父さん”

「……救難信号、ですか？」

第68哨戒任務群、旗艦：装甲巡洋艦“セント・ヘレナ”的ブリーフィング・ルームには、任務群各艦の艦長と副官などの首脳部、そしておそらくこれから山南司令が口にする作戦に必要だろうとこの船の士官・下士官が集められていた。

その中に、本来はゲストであるはずの古代の姿があつた。
「うむ。信号は強度が弱く不明瞭。波形から連邦の物ではあるだろうが、艦船の特定まではできていらない状況だ」

山南はそう告げた後、
「故に罠である可能性も否定できない」と続けた。

「知つている者もいるだろうが……昨年の後半より、ガミラスの動きが妙に散発的になつてきている。大規模攻勢の前兆と見るものも居るが、作戦部や情報部の判断ではド

クトリン変更が起きた可能性が高い」

そして、艦隊付参謀がいくつかのデータを立体映像で浮かび上がらせた後、「変更したドクトリン、その可能性の一つが『トレイダーレイド通商破壊作戦』だな」表示されるデータは、探しし辛い少数精銳の部隊が、まるで地球連邦の警戒網や哨戒網の範囲と強度を探るように浸透する行動である。

確かに通商破壊作戦の可能性が低くはないことを示していた。

そうなれば一番邪魔になるのが、彼らのような哨戒部隊だ。

哨戒任務群という字面だけ見ると比較的穩健な雰囲気があるが……語義から言えば、哨戒とは「敵の侵入や襲撃に備えて、周辺あるいは特定の区域を警戒する」という意味になる。

ぶつちやけてしまえば、彼らの行動はむしろ、地球とテレザートの間を定期的にあるいは不定期に巡回し、領宙を維持するための広義な意味でのハンターキラー任務を継続的にやっているようなものだ。

加えて以前に述べたように広域無人警戒網の保守点検や機材の補充も行う。

更に大きなくくりでの掃除任務だけでなく、輸送船団の護衛も任務に含まれているのだ。

地球連邦軍としては、本来なら護衛艦隊を司令部ごと新たに立ち上げたいところだろう

うが、そこまでの余裕はなかつた。

なので、哨戒任務群と輸送船団の予定をすり合わせて航行させているというのが現状だ。

ここにつらつらとあげつらつただけでも、ガミラスが通商破壊作戦を狙うとしたら、いかに哨戒任務群が邪魔な存在かわかるだろう。

できるなら、事あるごとに消耗させてすり潰したいと思うのも無理の無い話だ。まあ、他にも世知辛い事情もあると言えばある。

2194年後半あたりから戦場に出現し始めた地球連邦艦、八雲型戦艦を頂点とする最新鋭艦相手だとどうにも現状では分が悪いのだ。

そもそも2195年初旬から2197年中頃までの約2年半、ガミラスがキルレシオ1:10という散々な目に合わされた大きな理由の一つが、この新顔ルーキーたちに有効な戦術を見いだせず、また特効があるような兵器も用意できなかつたことだ。

しかし対して、哨戒任務群に回される船は、ルーキーたちの躍進により前線勤務を解かれた開戦以来の“古馴染み”ばかり。

多少改良はされていても根本的には変わらず、まだ対抗策を寝ることができた。

例え、現在の地球連邦軍でも最大の保有数を誇る“磯風型突撃宇宙艇（2191年当時は駆逐艦という区分だった）”は、同時に地球連邦軍最小の戦闘艦で、最も防備の

弱い船として知られている。

確かに防御に気を使う地球艦らしく波動防壁を標準搭載しているが、その強度は次元波動機関の出力に依存するので、小兵の出力では……具体的な数字を出すなら、ガミラスの代名詞たるデストリア級航宙重巡洋艦などが装備する330ミリ三連装陽電子ビーム砲相手では、同時にあるいは短い間隔で6発喰らうと、ほぼ確実にオーバーフローを起こし防壁が消失するのだ。

また、原作2199の初期ヤマトと同じく、コンバット・ステータスで波動防壁コクーンを維持できる時間は30分以内と制約もあつた。

そして、一度オーバーフローを起こすと、機関冷却が終わるまで防壁の再展開は不可能となる。

防壁を失つた下にある装甲表面の処理は、これまた機関出力の問題で効果が薄いとされビーム兵器に高い耐弾性を誇る位相変調装甲ではなく、積層蒸散式耐ビームコーティングだ。

330ミリ陽電子ビームも命中1発なら耐えられるが、ビームのエネルギーを分散・吸着して熱に変換して蓄え、粒子となつて装甲より剥離し排熱する構造なので同じ場所とは言わず、剥離した場所に陽電子ビームが直撃すれば、容易く貫通されてしまうのだった。

ついでに言えば、物理的なダメージに対する減衰は期待できず、むしろミサイルや魚雷の爆発衝撃で表面処理が剥がされ、そこにビームを撃ち込まれ沈んだケースもある。

その下にエネルギー転換装甲もあるが、それはガンダムSEEDシリーズに出てくるフェイズシフト装甲やトランスフェイズ装甲と基本的な性質は同じで、物理的な衝撃には強いが、熱的変化の大きいビーム兵器やレーザーなどの光学兵器にはそれほど高い効果があるわけでもなく、またエネルギーを消費する装甲だけあって使われる場所も限られる。

それでも原作2199の地球艦隊に比べたら雲泥の差と言つていい高い防御力だが、逆に言えば「ビームや魚雷、ミサイルなどを併用し戦術を工夫すれば、沈めることは難しくはない相手」であつた。

それは少なくともガミラスにとつて福音であり、その“脆さ”を反省し開発されたのが島風型重装宇宙防艦だが、今のところ前線に最優先配備され、哨戒任務群に回つてくることはない。

現状、第68哨戒任務群の保有戦力は、揚陸仕様に改修された旗艦の金剛型装甲巡洋艦“セント・ヘレナ”1隻に、村雨型駆逐艦（2191年当時は巡航艦という区分だつた）3隻、磯風型突撃宇宙艇12隻の計16隻という布陣だつた。

（決して弱い戦力とは言わんが……）

「とはいへ、救難信号を捉えて無視というのは軍の責務としても船乗りの義務としてもありえん。そこでだ……」

* * * * *

さて、ここは第68哨戒任務群より600光年ほど地球・テレザート間の正規航路か

ら外れた宙域……

「なにつ？ 微弱なテロン人の船と思わしき救難信号だと？」

ガミラス・地球人領域調査特殊作戦任務部隊、通称“ガミラス浸透戦闘隊”の一つを率いる“ヴァルケ・シユルツ”大佐は、その報告に薄くなつた髪の毛が乗つかる頭を捻らせた。

（確かに我々の任務は、テロン人の警戒網や哨戒網の穴を探り、突破口を探し出すことだが……）

だが、シユルツは知つていた。

祖国のザルツが敗れ支配を受け入れたことにより、今や忠誠を誓うべき本国となつたガミラス、その首脳部は少しでもテロン人の情報を欲しがつていていうことを。（これは好機かもしけんな……）

彼が率いてる艦隊の乗員は、全て二等ガミラス人……青い肌を持たぬ故にガミラス人から下等民族と見下されるザルツ人だ。

確かに戦争に負け、被支配民族となつたが、だからこそシユルツの胸のうちには常に同胞たちのガミラスにおける地位向上が念頭にあつた。

「ならば、発言権はあるにこしたことはないか」

幸い、自分の率いてる艦隊、発見されにくくするため戦隊規模ではあるが、銀河系での戦闘経験は無いがマゼラン星雲でガトランテイス相手に戦い、生き延びた精銳揃いだ。

しかも、自分が座乗するガイデロール級航宙戦艦“シユバリエル”を旗艦に、デストリア級重巡洋艦2隻とケルカピア級航宙高速巡洋艦4隻、24隻のクリピテラ級航宙駆逐艦を引きつれている。最新鋭ではないが、扱い慣れた「手に馴染んだ装備」で状態もよい。

あと艦隊戦には使い所がないが、陸地調査用にガミロイドと各種車両を積み込んだデラメヤ級強襲揚陸艦も3隻随伴している。

(こ)には判明したテロン人の大規模軍事拠点はない。出てくるとしてもパトロール部隊くらいだろう

だからこそ、彼は進路を救難信号の方向へと向けた。

その先に、何が待っているかを知ることもなく……

56 第07話：（頭髪が薄くなつても）働くお父さん、

第08話：“ゲシユ＝タム・フイールドとゲシユ＝タム・ウォールの違い（この世界線限定）。ワープ・グリッドとか、遭難者はザンネンパツキンとかそういう話”

天の川銀河、地球・テレザート間の航路に程近いとある惑星……

宇宙はただただ空虚に広く、暗くて冷たくて寂しい場所だという。

まあ、確かに彼女がいる状況も、それに当てはまると言えば当てはまる。

「くらいよー、さむいよー、こわいよー」

ただし、魔法は尻から……もとい。ただし、緊張感は無かつた。

というか、何か無駄に懐かしい言い回しをしている気もする。

さて、ここに居るのはどこぞの青肌の王様とよろしくやつてるパツキン女王……とよく似た顔立ちだが、大分幼い印象のパツキン少女だ。

特に身長^{タツバ}と胸部装甲がスケールダウンしている。

強いて言うなら金剛型戦艦と高雄型重巡洋艦の差だろうか？ 艦これ的な意味ではない。

さて、彼女の名は“ユリーシャ・イスカンダル”……立派な原作のキー・パーソンだ。彼女がなぜ地球からまだ遠く離れたこんな場所にいるかと言えば、

「いきなり叩き起こしてお船に押し込んで打ち出すなんて、お姉さまも無茶苦茶だよおー。わたし、今の世の中のこととか全然知らないのにー」とまあそういうことらしい。

少し補足すると……

このユリーシャ、マジにスター・シャの血のつながつた妹で、イスカンダル式VRで日々楽しくあらゆる世界を旅し、ちょうど六神合体したときにクソゲーッぶりに定評あるリアルに引っこ抜かれた。

ちなみにこの世界のイスカンダル人＝リアルに絶望した廃人VRゲーマーと思うとだいたいあつてる。

本人曰く、「世情は知らない」と言つておくが、ガミラス視点で見た「可能な限り客観的な情報」は、航海中にVR学習システムでインストールされており、知識としてはかなりあるが、感覚として追いついていないようだ。

それはそうだろう。

リアルに引っ張り出されたら、久しぶりに会った（ユリーシャ本人は久しぶりという
感覚は無かつたが）実の姉には青肌の彼氏がおり、半分寝ぼけていたせいもあるが、
『お姉さま、いつの間に若いツバメひつかけてきたの？ 自分のお歳、考えたこと、ある
？』

と素直すぎる感想を口にしたら、グッドモーニングな錐揉み落^{イヌカンダル}式^{ローリング}ファイツシヤーマンズ・スープレックスを食らつた。

相変わらずの姉の技のキレにちょっとサンクテルに戻りかけた。イスカンダルの女王はキレツキレだつた。

そして前述の通り、ツイン・ゲシュ＝タム・ドライブが自慢のステルス・フィールド（弱）装備の超最新鋭（シミュレーションのみでリアルでは試験航海もしていない出来たてホヤホヤ）金びか宇宙船に押し込まれ、推定地_テ^ロ邦領域へ射出された。

ちなみに金ぴかの表面は、間違つてもイスカンダル女王の趣味とか自分の髪色／瞳の色に合わせた結果ではなく、れつきとした防御装備、ビーム反転コーティングという实用的な物。

基本的にガンダムSEEDシリーズの『ヤタノカガミ』と似たようなものだが、33

0ミリ陽電子ビーム／陽電子カノン砲ぐらいまでなら180度反転させて撃つってきた相手に意趣返しできるが、490ミリ陽電子ビーム砲や480ミリ陽電子カノン砲となると少し厳しく、分光拡散させるのが精いっぱいというところだろうか？

いずれにせよ、イスカンダルの謎技術なのは間違いない。

加えて、金ぴかの前に“ゲシュ=タム・フィールド（船外にコクーン状に展開する防御フィールド）”と“ゲシュ=タム・ウォール（船体表面に展開するエネルギー・シールド）”という二段構えの波動防壁亞種が揃ってるのだから鉄壁も良いところだろう。

ちなみに二種類の波動防壁を併載する船は人類史上初かも知れない。

武装を付けてない分、防御特化にした設計思想なのだろう。

ここまで技術があるのなら、現行艦だと一部の大型艦以外は紙装甲呼ばわれてしまふガミラスに技術供与してやれと言いたくなるが、実は装置現物は渡していないが、理論やら何やらはだいぶ前（エーリク・ヴァム・デスラー統治時代）に渡しているのだ。

だが、ガミラスはまずゲシュ=タム・フィールドの艦船に搭載できるほどの小型化に失敗し、浮遊大陸などの大型構造物のデブリ対策装備などにとどまっている。

つまり、装置は大きく（それこそ現状は最小サイズでもゼルグート級並み）、広く薄く防壁を張るのには向いているが、狭く堅牢に張るのには向いていない。

ゲシュ=タム・ウォールにいたっては、装甲素材との干渉を防ぐエネルギー・クリア

ランスの算定が上手く行つておらず、グリッド制御で活路を見出そうとしてるが、今とのところはエネルギー・シールド自体が装甲を傷つけてしまうために実用化には至っていない。

それだけイスカンダルの技術の高さが垣間見えるが、おかしな所に落とし穴があつた。

やはり波動防壁の豪華ダブル搭載は技術的な無理があつたのか、あるいは次元跳躍門バラン・ゲートを使わず100日足らずでここまで来れるイスカンダル・コアのツイン・ドライブがピーキー過ぎたのかはわからないが、エンジンと波動防壁が奇妙な干渉を起こして機関故障。

不時着を余儀なくされたユリーシャは、頭と膝を抱える羽目になつた。

「だからあれほど、機関周りはワープ・グリッドで疑似次元的に独立・安定化させておくと……」

このアイデア、実は後によりによつて地球で実用化されることになるのだが……それはまた別の話。

とはいゝ、「こんなこともあるうか」という訳ではないかもしけないが、急ぎすぎたことを自覚していたどこぞのパツキン墓守も、不具合が出る可能性を考慮していたの

62 第08話：ゲシュ=タム・フィールドとゲシュ=タム・ウォールの違い（この世定）。ワープ・グリッドとか、遭難者はザンネンパッキンとかそういう話。

か、ガミラスで回収されこつそりイスカンダルで修理されていた地球式の救難信号発信機を積み込んでいた。

焼くならマグカップ、たまに行くならこんな店、拾つてもらうなら地球連邦にという事だろう。

そもそも、彼女に託された“お役目”は、地球連邦、それも要人に接触しなければ話にならないのだから当然であつた。

幸い、救難信号は少し動作が怪しいが発信自体はされてるようだ。

なぜ地球テロソ人が自分たちと接触する前にイスカンダル式超光速通信機を持つてゐるのか謎だが、おかげで同じ方式のイスカンダルで修理できだし救難も呼べる……多分、呼べるはずだからユリーシャ的には文句はない。

むしろ文句をつけたいのは、やつつけで仕上げて性能だけはすごいが信頼性に問題のある船で送り出した姉にだ。

「とりあえず、今は大人しくしてゐしか無いかなあ……」

とボリボリ非常用宇宙食をかじる金髪の妹君……なんというかその姿、そこはかとなく残念臭がするのは気のせいだろうか？

「それにも……」

ユリーシャは小さくため息を突き、

「わたしに『和平の使者』をやれとか、お姉さまも無茶振りしてくれるよお」

第09話：“この作戦が終わつたら…… 真のヒロイン （?）の登場です”

「惑星ガルガンチュア157、それが特定された救難信号の発信源という訳だ」

ガルガンチュアはここ100年ばかりで頻繁に行われている地球・テレザート間の航路周辺を探索する無人探査船シリーズの一つで、ガルガンチュアが157番目に発見・データベース化した惑星という意味だ。

ごくごくありきたりの太陽型恒星の第4惑星で岩石惑星、公転軌道面はぎりぎりハビタブルゾーンに位置していた。

精密な調査は現在行われておらず、当然のようにテラフォーミングの計画はない。

ぶつちやけ、人口150億人くらいしかいないのに既に主にテレザートとの航路中に拠点・中継点として二桁の人類居住惑星を保有し、更にその倍に達する即時民間人居住可能惑星（未入植惑星）を抱えている地球連邦にとり、今のところ魅力も価値も無い惑星だった。

だが、その辺鄙な惑星が唐突に奇妙な価値を持つてしまったのが、問題だつたのだ。

「まあ、これが買なら確實に、買じやないとしても救難信号をキヤツチできる程度の近場にいれば、十中八九ガミラスは来るだろうさ」

救難活動の真っ只中など、狙つてくださいと言つてるようなものだ。

救難・救助活動中は襲わないなんて倫理観、価値観の違うガミラスに求めるほうが間違つている。

こつちが少勢力だなんてことも、接近すればすぐにわかるだろう。

「まさに小癩な邪魔者を始末するにはうつてつけという訳だ。例え、我々のような小部隊が消し飛んだところで戦争の趨勢に影響なぞないが、塵も積もればなんとやら。敢闘精神あふれる相手なら、仕留められるときに仕留めない理由はないさ」

そして生憎、ガミラスは闘争心が弱いという評判を受けたことのない民族だった。

「ならばこちらも相応の準備をし、打てる手は打つておこうということだな」

山南はそう区切ると、

「艦隊は警戒態勢を維持しつつ、防御陣形を組みガルガンチュア157 静止衛星軌道上で待機。救難活動は、空間騎兵隊に担当してもらおうと思うんだが?」

無論、永倉をはじめとする空間騎兵隊の紳士淑女諸君はサムズ・アップだ。

というかむしろ本職であり、本業の一環である。

「敵影が無いうちに軽武装（この場合は個人携行できる装備）の空間騎兵隊と衛生官を乗せた”コスモ・シーガル”を救難機として先行させる。無論、船舶が重度の損傷をしている場合に備え、”95式空間装甲騎兵”も陸上随伴兵力としてつける」

経験上、緊急搬送が必要な要救助者がいることを想定すれば、シーガルに乗つけて行けるのはパイロットと衛生官、そして引率役の隊長を含めて精々6名程度だろう。

小隊付きの空間装甲騎兵は4機……正直、罠が張られるなら心もとないが、（なら、保険をかけておくか）

「古代少尉」

「はっ！」

小気味よい返事に山南はこの新人の評価を内心で上方修正しながら、

「『積み荷』のお前さんに任務を割り振るのは心苦しいが、すまんが航空予備として作戦終了までコスモ・ゼロのコツクピットで待機しておいてくれんか？」

ガミラスの艦隊がいつ来るかわからない現況、艦隊を惑星表面に降ろすのはリスクが高いすぎる。

地球・ガミラスを問わず現代の軍艦は、大気圏内を飛べるとしても宇宙空間でこそその真価が發揮できるように作られているのだ。

しかし、同時に陸上に部隊を展開する以上、エアカバーの重要性は今更語るまでもな

いだろう。

実際、第6・8哨戒任務群にも航宙機（航空機、艦載機）もあるが、山南が座乗する旗艦の金剛型”セント・ヘレナ”に8機、率いてる3隻の村雨型駆逐艦に2機ずつの艦隊合計14機に過ぎない。

ガミラスの駆逐艦以上の船には艦載機搭載能力があるのはすでに知られていることであり、機数的に劣勢な可能性は十分にある。

また、艦隊に配備されているのは今や旧式化の波に抗えなくなりつつある”コスマ・パンサー”だ。

開戦初頭ならともかく、今となつてはガミラス航宙機に対して圧倒的優位を取れる訳ではない。

だからこそ、ここで古代進少尉とコスマ・ゼロが意味を持つ。

山南には古代の具体的な腕前はわからないが、第7航宙団に配属され最新鋭機の調教を任せられ、そして実験機部隊に引き抜かれるのだから腕は悪くないと想像できる。

それにコスマ・ゼロは第6・8哨戒任務群の正規の命令系統には入つておらず、航空部隊の一員としての投入は難しいが、かと言つて最新鋭機を遊ばせせておくのは勿体ない。

「了解しました！」

その迷いのない古代の敬礼に山南は満足を覚えつつ、さらに思考を巡らせる。思考を止めた時が死ぬ時と、彼は戦場で学んでいた。

☆☆☆

さて、ブリーフィングが終わると、コスモ・シーガルに乗つて臨時編成の救助隊を引率することとなつた永倉志織は、任務の準備をしていたショートカットで胸の大きい年下の友人を捕まえた。

「真琴おー。お前さん、今回の隨行衛生兵に志願したんだって？」

「あつ、うん。志織さん」

そう振り向いた彼女の名は、“原田真琴”。今年二十歳になる正確に言えば衛生兵ではなく衛生下士官、階級は二等軍曹だ。

「じゃなかつた永倉軍曹」

と微笑みとともに敬礼する真琴である。ちなみに永倉は軍曹（一等軍曹）なので1階級上である。

「公的な場じやあるまいし、そういうのは気にしなくていいさね。いや、なんだつて志願したんだい？ 罷である可能性もあるし、そうじやなくてもいつガミラスが現れるかわからない危険な任務だよ？」

すると真琴はうんと考へ、

「そこに怪我をした人がいるかも知れないから……かな？」

（そういや、こういう娘だつたねえ〜）

永倉と真琴の出会いは、まだ真琴が新米衛生兵だつた頃まで遡る。

その頃、演習場で事故があり、巻き込まれた永倉の部下も軍病院に運び込まれた。

強がり軽い治療だけ受けて演習に戻ろうとする部下を盛大に叱りつけたのが真琴だつた。

強面の古参兵相手に、一步も怯まず腰に手を当てる「私、怒つてます」ポーズで“いのちをだいじに”について説教をかます真琴は、タジタジになる古参兵込みで実に見ものだつたらしい。

その気つ風の良さと鼻つ柱の強さを氣に入つた永倉は、声をかけて「一杯おごらせてくれ」と飲みに誘つた。

互いに酒好きのせいもあり瞬く間に意氣投合し、現在まで続く友誼となつたのだつ

た。

「つまり、ほつとけないってことかい？ 居るのは敵かもしないよ？」
「えつ？ 関係ないよ？」

キヨトンとした顔で返してくる真琴に、思わず苦笑する永倉。

（まあ、こういう肝つ玉の座つた娘には、つい褒美をあげたくなるもんさね）
「なあ、真琴。あんた、前に彼氏欲しいとか言つてたよね？」

「えつ？ あつ、うん。そりやあ欲しいけど……」

永倉の意図がわからず、ちよつと困った顔をする真琴に永倉はニヤリと笑い、
「この作戦が終わったら、あんたに良さそうな男、紹介してやんよ。生き残れれば、将来
有望だよ？」

……それはフラグだとか言つてはいけない。

第10話：『近い将来に名将と呼ばれるかも知れない、生まれた星の違う二人の大佐が邂逅する件について』

「ふむ……どうやら既に救助活動を始めているようだな」

最大探知距離で捉えた敵影は、数こそ少ないが艦首陽電子衝撃砲を備えた舳先をこちらに向けつつ隙の無い防御陣形を取つており、その練度の高さをうかがい知れることができた。

（なるほど……道理で歴戦たる我々が、ガトランティスとの戦を差し置いてまで、わざわざルビー戦線より引き抜かれたか得心がいったわ）

「これでは、ガミラス正規軍も苦労するはずだわい」

ゲシユ＝タム・アウトは感知できない距離でした筈だが、敵艦隊はどうやらこちらを

先に発見していたらしく既に艦載機を発艦させていた。

（艦載機は艦隊攻撃には使わんか……）

展開パターンからそう読み取れる。

「敵勢力は重巡洋艦1、駆逐艦3、戦闘艇12です。おそらく救助作戦完遂まで、当該惑星の衛星軌道上にとどまり耐久する腹積もりではないかと」

と進言するのは艦隊付参謀、浅黒い肌の筋骨隆々とした体躯に鋭い眼光、そしてスキンヘッドに濃い髭と個性の塊、艦隊参謀より剣と魔法の世界の方が似合いそうなヴァル・ヤレトラー少佐だった。

「そしておそらくですが、彼我の戦力差を認識している以上、既に増援要請をしているものかと思われます」

そう付け加えるのは、ちょっと気弱そうな印象を受ける小太りの少佐、副官の名前は厳ついゲルフ・ガントだつた。

こちらは対峙してゐる戦力だけで、ガイデロール級宇宙戦艦“シユバリエル”に、デストリア級重巡洋艦2隻とケルカピア級宇宙高速巡洋艦4隻、24隻のクリピテラ級宇宙駆逐艦、つまり総数31隻と数的にほぼ倍である上、艦格的にも勝つてゐる。

敵艦隊からすれば、増援を呼んで然るべきだろう。
艦隊指揮官のシユルツは短く逡巡し、

「どうやら地球人は、我々が艦隊戦のみを狙つてゐると判断してゐるようだな……」
(ならば、教えてやろうではないか)

確かに名誉や面子を過度に重んじるガミラス人なら、正面切った艦隊決戦を望み、そ

れに固執するかもしない。

だが、我々はザルツ人だ。

名誉や面子よりも、戦果を……実利を重んじる！

「我々が毎度毎度、船同士の殴り合いを望むと思うな……！」

かつてあつた祖国は、もう歴史用語に成り果てた。

ザルツ人は、原作でもガミラスに対する愛国心、忠誠、献身は印象的に書かれていたが、それは全て自らの国家を敗戦で失つた民族の悲哀……そうであるからこそその発露だつた。

國破れた彼らが選べるのは、青い肌を持つ純血のガミラス人に下等民族と蔑まれながら二等ガミラス人として生きてゆくことだけだ。

だからこそ、シュルツには戦果が必要なのだ。

ザルツ人として生きることが叶わなくなつた同胞たちの地位を、少しづつでもガミラスという枠組の中で高めるために。

「連中、どういうつもりだ？」

“セント・ヘレナ”のC.I.Cで、山南はそういうぶかしむ。

本来、ガミラスの対地球ドクトリンは、“高機動突撃砲雷撃戦”、つまり古式ゆかしい肉薄水雷戦術だ。

いや、正確には現行のガミラス艦隊の装備で防御がやたらと堅い地球艦にダメージらしいダメージを与える手段はそれが結果として一番効率が良いので選択されているという感じだ。

例えば、艦隊単位で舳先を向けあつて押したり引いたりするのオーソドックな砲雷戦では新型艦でも出てこない限り火力でそこまで差はないものの、波動防壁の標準搭載で防御力に大差をつけている地球艦隊の圧倒的有利だ。

なにせガミラス艦が確実に沈む距離でも相手の船体には傷一つ入れられないのだから。

では今度は、その防御力の差を覆す……まではいかなくとも、穴埋めするにはどうすれば良いか？

ガミラスはなんだかんだ言つても宇宙戦争に慣れており、また単艦ならともかく戦隊や分艦隊規模の機動的な運用は一日の長があるのだ。

技量よりも指揮統制システムが物を言う1000隻規模の大艦隊となればまた話は変わつてくるが、指揮官やら艦長やらの技量や経験こそが鍵となる100隻程度まで特に高機動戦術機動となると、やはりその手の戦術艦隊機動に手慣れたガミラスに軍配が上がる。

では、今度はガミラスの強みを活かすにはどうすれば良いか？

その最適解が、ダメージの入る見込みのない遠間合いからのダラダラとした撃ち合いでなく、機動で翻弄しつつ一気に間合いを詰め、ありつけの火力をぶつけられる近距離から叩き込み、まずは波動防壁を引つ？がす……本当の戦争はそこからだというノリだ。

もともと、高機動を生かした水雷戦術なり突破戦術なりは、ガミラスが金科玉条とするお家芸の範疇だ。

驚くべきことに、300mオーバーの戦艦級すら水雷戦隊旗艦として使われるのが、ガミラスという国家の国防方針だつた。

例えば、ガイデロール級で知られる鹹獲したガミラス戦艦を調査した技官は、『この造りは戦艦じやない。艦隊指揮機能を持つ、戦艦サイズの重雷装大型巡洋艦だ……』

と驚愕したといふ。

いかにガミラスが高機動水雷戦術を重んじてるかわかる技術的ランドマークだつた。より詳しく書くなら、ガミラスの一定規模以上の艦隊は、大きく2つのパートで構成されている。

一つは今回、シユルツが率いてるような編成の「実質的な主力で多数派」の槍として使われる水雷戦部隊。

もう一つは、それを統括する地球連邦的な解釈では「戦艦らしい戦艦」である、鈍足でありガミラス・トレンドの高機動戦術を陣頭指揮には向かないが、それを補うように異常なまでの重装甲による撃たれ強さと、艦橋部が司令部一同を乗せたまま脱出艇により、あまつさえ単独でワープし本体が沈んでもまんまと逃げおおせることができる生存性を併せ持つ“ゼルグート級”を旗艦とする艦隊司令部隊だ。

水雷戦隊と一緒に突っ込んできて、的の小ささに見合わぬ攻撃力を持つガミラス艦上

航空機の母艦がいるのも、大体後者の位置だ。

だが、今回は見慣れた水雷隊編成。普通なら旗艦と思われるガイデロール級が先陣を切つて突撃してきてもおかしくないはずだが……

(コイツは一体、何を意図している……?)

予想に反して最初に突っ込んできたのは、24隻いる敵駆逐艦部隊だ。
それは良い。確かに水雷線の花形は駆逐艦かもしれない。

だが、

(なぜ、駆逐艦のみを先行させた……?)

しかし、山南のやるべきことは変わらない。

出現したガミラス艦隊の規模を確認したとき、既に増援要請は出したが間に合うかどうかは微妙なところ。

ならば、救助活動が終わるか増援が来るまでの間、

「現有戦力で耐久するのみだ」

こうして、山南修とヴァルケ・シュルツという奇しくも同じ大佐という階級の、そして近い未来の名将同士の、最初の戦いの火蓋が切つて落とされるのだった!!

78 第10話：『近い将来に名将と呼ばれるかも知れない、生まれた星の違う二人の大
戦する件について』

第11話：“一筋縄では行かない状況”

シユルツ率いるガミラスの小艦隊の動きは、山南のよく知るガミラス式宇宙砲雷撃戦術とは微妙に異なっていた。

実質的な水雷戦隊旗艦である戦艦が巡洋艦や駆逐艦を率いて肉薄するような戦いでなく、まず24隻の駆逐艦を先行させ、その後ろを戦艦と巡洋艦で編成された7隻がついてくるというような布陣だ。

山南も何かがおかしいと思いはしたが、ここは定石通り磯風型突撃宇宙艇12隻で迎撃を行うこととした。

（おそらくは、駆逐艦隊で突撃路を形成し、一気に殴りかかる気だろうが……）

これまで類似した戦術パターンはあった。

今回はこちらの数は半分だが、迎え討つことに徹すればそこまで不利ではないと思いたいところだつたが……

「なつ!？」

その挙動に驚愕した。

磯風型が接近するなり、ガミラス駆逐艦隊は戦いを避けるように散開し、その間隙をついて戦艦・巡洋艦が増速して突進！

磯風型めがけて猛烈な陽電子ビームとミサイル・魚雷の弾幕を浴びせてきたのだ！。しかも回避しようとする磯風型にめがけ、『逃さん！』とばかりに艦載機部隊を投入し、穴を埋めてきたのだ。

地球連邦艦と同じくガミラス艦も限定的宇宙機運用能力を持つことは常識の範疇だが、よもやこういう形で投入されるとは思わなかつた。

これまでのガミラス・ドクトリンなら十中八九、宇宙機群は『セント・ヘレナ』に集中させ、一刻も早い撃沈を狙つてくるはずだ。

そして、分断される磯風型をすり抜けてガミラス駆逐艦隊は『セント・ヘレナ』と3隻の村雨型駆逐艦へと急速接近してくる。

そう、6倍の艦数でだ。

磯風型が忙殺されている以上、こちらの現在追加できる戦力は14機の『コスマ・パンサー』だけだつた。

しかも、今回は敵宇宙機迎撃をメインとして想定していたため、コスマ・パンサーには強制推進剤タンクと6連装高機動ミサイルポッドをそれぞれ2基ずつしか外部搭載

していないし、機内のミサイルも全て高機動ミサイルだ。

プラズマ火球型の弾頭のため全くの無力というわけではないが、数的にも優勢な艦船相手とすると正直火力は心もとない。

しかし、それは相手も同じことだ。

分断で各個撃破を狙うとしても、決定打に欠ける。

確かに特に旧式艦のコンバット・ステータスでの波動防壁の展開時間は長いものではないが、かといってその堅牢な防御力はそう簡単に覆るものではない。

正直、先手を取られたが、かといって艦隊に重度の損傷を与えるほど巨大な戦力というわけではない。

事実、一見逃げ回つてるように見える磯風型も隙を見ては果敢に反撃してはいるし、自分たちとて黙つて撃たれるような真似はしない。

地球連邦は耐えて戦うことを苦手としてはいないが、それは別に守りにのみ傾注しているわけではないのだ。

(だとすれば、目的はなんだ……?)

山南は戦闘指揮を行いながら思考を深化させる。

寡兵であるこちらが増援を呼ぶことはわかつてははずだ。

敵艦の動きを見ればわかるが、彼らは高練度の部隊だ。つまり、経験の浅い鬭争心ば

かりに溢れた輩ではない。

だとすれば長引けば、不利になる可能性が高くなるのはガミラス側だということが理解できていないとは思えない。

それに攻撃パターンも問題だ。

(無理な攻撃をせず、むしろ被害を抑える方向の戦闘機動か……)

例えれば絶好の攻撃位置につけるとわかついても、決して艦種陽電子衝撃砲の射角には入らない。

実体弾は誘導弾もあるが、過流加速された陽電子ビームは艦首のフィン状のパーツで発生させる重力レンズを用いて、ある程度の偏向はできるが、基本的には固定砲だ。

開戦以来の古株である金剛型の最強武器の特性をガミラスが解析していることは不思議ではないが、ここまで徹底されるのは珍しい。

普通のガミラス艦隊は、「攻撃こそ最大の防御」と言わんばかりにリソースを攻撃に割く。防御を軽視しているとまでは言わないが、防御が攻撃より優先されることはない。だが、今回の敵の行動はまるで……

(まるで敵の方が時間稼ぎをしてるようじゃないか……)

その時、不意に閃いた事がある。

そう、この互いに決定打に欠ける戦場における、ガミラスの勝利条件だ。

「まさか……！」

自分の結論が正しければ、事態は一刻を争う！

悠長にいつ来るか不明の援軍を待つていたら、完全に盤面がひっくり返されかねない。

「古代少尉に出撃命令を出せつ！」

「えつ？」

驚くオペレーターに山南は一喝するように、

「すぐに救難隊のエアカバーに向かわせろつ！　俺の予想が正しければ、敵には別動隊がいるつ!!」

* * * * *

時間は、コスモ・シーガルが救難信号の発信地ボイントに到着した時まで遡る。

「うそお……」

宇宙服の中で、思わず原田真琴は口をあんぐりと開けてしまう。

対して、戦闘用宇宙服を着こんだ永倉志織は、どうやら不時着したらしい『それ』を

見上げながら、半ば呆れたような表情で、

「さしづめ、『ゴールド・シップ 黄金の船』ってどこかねえ……」

いや、それ多分色々ダメな奴だと思う。